2022

LA NOUVELLE

No.29
AUTOMNE

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者　藤倉洋一（1970/ 昭 45）
2022.10.1 発行

第 26 回仏友会総会

4 月 24 日（日）、第 26 回仏友会総会・講演会を大手町サンケイプラザでハイブリッド方式で実施した（会場参加者 25 名、オンライン参加者 21 名）。

金澤会長代行 (1968) の挨拶と会務報告の後、三浦省三幹事 (1977) による会計報告、及び富田和義幹事 (1968) による監査報告が行われ、原案どおり承認された。また、2022 年度の幹事体制について金澤会長代行より報告があり、幹事全員の再任が承認された。

総会終了後に行われた高田信二講師（1980/ 昭 55 卒）の講演の概要は、本人による下記のまとめ記事を参照されたい。

※総会・講演会の詳細報告は、東京外語会メールマガジン第２３３号】(6/1 発行) の会員便りに掲載。(幹事 中村日出男記)

講演中の高田講師

世間を知り過ぎた男

高田信二（1980/ 昭 55）

「でも、しか」教師と言われるように、私自身も「でも、しか」ジャーナリストとして 42 年間、人生の大半を過ごしてしまいました。

大学 4 年秋の就職活動では、新聞、テレビ、出版とマスコミを中心に受験しましたが、銀行も航空も運輸も 20 社以上落選。卒論は、17 ～ 18 世紀仏文学の朝倉剛先生に無理にお願いして印象派（ドビュッシーとモネ）だったので、大学院に進むか、東大の美術史科に学士入学するか、それとも留年するか迷っているうちに、大学の就職課から「来年 2 月に時事通信社が募集しているので受けてみませんか」と、自宅に電話がありました。これが運命の分かれ道でした。苛烈な？競争率をやっと勝ち抜いて、編集記者だけ採用 9 人の 1 人に潜り込むことができました。最初の東京・運動部時代はロサンゼルス五輪取材などを経験し、大阪に転勤して阪神タイガース等を担当。入社 10 年目の 1990 年、東京に戻り、希望して文化部に配属され、芸能から文芸、家庭などを体験し、このまま文化部で骨を埋めるつもりでしたが、当時の部長と折り合いが悪く、20 年目の 2000 年、43 歳の若さで校正の整理部に左遷。その後、帯広支局長を命じられ、不慣れな営業まで経験しました。御想像通り、この間、365 回は退社を考えました。

そんな、さほど実績や業績もない私が何で歴史と伝統のある仏友会の講師に選ばれたのか不思議でした。しかし、入社以来の 42 年間を振り返ってみると、今は亡き松本清張や司馬遼太郎にも会っている。王、長嶋にも吉永小百合にもローリング・ストーンズまで会っている。恐らく、普通の人だったら経験できないことを体験し、会うことは叶わない多くの有名人に会って話までしました。

何と言っても、学生時代から知的好奇心が旺盛で、「世の中のカラクリ」が知りたかった。誰が世の中を動かし、どういう組織で繋がっているのか？それには、結果的にジャーナリストになるのが一番でした。若い頃は、現場では、いつも無関係な第三者でしかいられない自分自身を嘆いたものでしたが、第三者しかできない書けないことがあり、「時代の証言者」として書き残す義務があるとさえ感じ、仕事が楽しくなっていきました。

その転換点が、1998 年にレコード大賞の審査員に選ばれたことでした。審査員になったお蔭で、芸能界のマル秘情報が信じられないほどドンドン入るようになりました。それまでインタビューを申し込んでも、鼻であしらうような感じで断られていたのに、大物歌手も大女優もオッケーです。「何じゃ、こりゃあ」てな感じです。「世の中のカラクリ」が分かった瞬間です。

皆さんの夢を壊すようですが、特に華々しい芸能界は裏社会と表裏一体です。小指のない方とは何人かお会いしましたが、情報源は芸能関係の会社の社員です。その人のマル秘話を忘れないように、トイレの中や電車の中でメモし、その話の裏付けを取るためにも、累計数百冊の文献にも当たりました。その結果、政官界＝財界＝広域暴力団＝新興宗教団体＝右翼等圧力団体＝マスコミの緊密な関係も分かりました。

通信社とは何か、知らない人の方が多いと思いますが、ニュースの卸売業みたいなものです。新聞社だけでなく、ラジオ・テレビ、出版社、官公庁等にも情報を配信します。私の書いた記事は、全国紙、地方紙、スポーツ紙など 50 紙ぐらいに掲載され、テレビでも読まれました。

通信社を知るには、まずメディアの歴史を知らなければなりません。明治の朝野新聞や中外物価新報、萬朝報、昭和の同盟通信社のことも知ってもらいたい。近代メディアを起こした成島柳北、益田孝、福沢諭吉らのこともその時代背景とともに知ってほしいと思い、講演会のレジュメを用意しましたが、その 4 分の 1 も話すことができなかったのが、残念でした。それ以上に、裏社会の話でしたから、滅多に活字にもできないオフレコの話です。当日、御参加できなかった皆さんも本当に残念でした。

記者とは、諜報員みたいなものです。ニュースとは何か？いかなる経緯でニュースが「商品化」され、その間に、どんな圧力や自己検閲が働くのか、体験した記者しか分からないことでしょう。

そこで、お知らせめいた話ですが、私は今でもブログを書き続けています。そこには講演会で話せなかったことも含めて色んなことを書いていますが、自己紹介の欄の最後に私が会ってきた有名人の名前にも触れていますので、是非ご覧ください。ブログは「渓流斎日乗」keiryusai.com といい、高田信之介の筆名で書いています。渓流斎は雅号です。

オンラインで参加した会員の皆さん

総会会場に直接参加した会員の皆さん

第 27 回サロン仏友会のお知らせ
-- 新たな形で再スタート --

✦**日時**：2022 年 11 月 27 日 (日) 14:00 ～ 16:30
講演会並びに懇親会

✦**会場**：大手町サンケイプラザ 303 号室
（東京メトロ大手町Ｅ１出口）
講演会はオンライン配信を予定。会場参加者は 40 名ほどを予定。

✦**講師**：渡邊啓貴氏（1978 / 昭 53）
―帝京大学教授、東京外国語大学名誉教授―

✦**演題**：**「マクロン第二期政権下のフランス」**
パンデミックをはじめ、力による圧制や他国への侵攻等で世界中が先の見えない多くの不安を覚える中、本年 4 月にフランス大統領選挙が行われました。激しい決戦投票の結果、現職マクロン大統領が再選されました。初当選時にまさる多様な内外の難局を抱え、マクロン率いるフランスはどこに向かうのか、２年半ぶりに現地を訪問された渡邊啓貴先生にこの揺れ動くフランスの現況を熱く語っていただきます。
（2017 年の新星マクロン大統領誕生時の同先生のご講演後記は La Nouvelle19 号に掲載。）

✦**参加費**：会場＝ 6,000 円、オンライン＝無料
（会場で通信費 1,000 円 / 年もお受けします）

✦**申込〆切**：**11 月 14 日（月）**
アドレス登録されている方には改めてご案内いたします。未登録で参加ご希望の方も下記アドレス宛てにメールでお申し出ください。
（担当：吉田尚子　naoko0304358@gmail.com）

映画アーカイブへのお誘い

武田　潔（1980/ 昭 55）

パリにシネマテーク・フランセーズという機関がある。希代の映画コレクターであったアンリ・ラングロワが 1936 年に創設し、以来、幾多の変遷を辿りながら、古今東西の膨大な映画作品の保存・上映はもとより、フィルムの修復やデジタル化の作業、映画関係の文献や各種資料の収集・公開などの活動を行っている、おそらく世界で最も有名な「映画アーカイブ」である。私も留学中には足繁く通い、映画研究者となってからも調べ物でパリに赴く際には必ず足を運んだ。

今日では世界各国にそうした映画アーカイブが存在するが、わが国でも 1970 年に東京国立近代美術館の映画部門として「フィルムセンター」が開設され、京橋にある同館にはこれまた学生時代に通い詰めた。1984 年には火災により建物と所蔵フィルムの一部が焼失したが、1986 年に設備の整った収蔵庫が相模原に新設され、95 年には京橋の本館もモダンな建物に改築されて、その間、竹橋の近代美術館の講堂を借りて行われていた上映も本来の場で再開された。そして、2018 年には 6 つ目の国立美術館となる「国立映画アーカイブ」として独立を果たし、現在に至っている。

大学で映画を講じる立場となってからは、授業で毎回の特集上映の番組を必ず紹介し、特に初年度の科目では実際に同館で映画を鑑賞してその感想を書くことをレポートの課題としてきた。提出されたレポートでは、作品の内容とは別に、学生たちが二つの驚きを語るのが常である。一つは観客の大部分が高齢者であることで、これは私と同じく、若い頃から同館に通っていた映画ファンがそのまま齢を重ねたことと、現代の若者にとっては映画以外の娯楽も多く、映画を見るにしても話題の新作をシネコンで、さらにはネット配信で見ることが習慣となっていて、国立映画アーカイブの活動には馴染みがないといった事情によるのであろう。映画文化に対する関心を高め、そのいっそうの振興を図るためには若年層の観客を増やすことが不可欠であり、今年の 3 月に大学を退くまで、私もまたそのためのささやかな努力を続けてきた。

もう一つ、学生たちが新鮮な驚きとして異口同音に挙げるのが、周りの高齢の観客たちが、例えば可笑しな場面ではこぞって大きな笑い声を上げるなど、上映中に生き生きと反応する姿である。確かに、最近の学生は授業で参考上映を行っても至っておとなしく、コメディ映画でもくすりとも笑わないことが多いが、理由を聞いてみると、これもシネコンで上映前に流される注意喚起のメッセージを受けて、映画を見ながら声を上げて笑うことは、隣席の友人とおしゃべりするのと同様の迷惑行為だと勘違いしていることが判明した。唖然とするばかりであったが、なるほどそうした“常識”のゆえに、近頃では観客が賑やかにかけ声をかけながら映画を楽しむ「応援上映」なる催しも若者に人気なのかと、妙に納得もした。

ともあれ、若い皆さんには是非、国立映画アーカイブに足を運んでもらい、最高の保存状態のフィルムと最良の映写によって作品を堪能するとともに、本来の映画鑑賞の作法をじかに体験してもらいたいものである。そして、世代を問わず、映画がお好きで、まだ同館を訪れたことのない方々にも、映画の大いなる愉しみをもたらしてくれる場として、一度お出かけになることをお勧めする（同館の番組など詳しいことはホームページ https://www.nfaj.go.jp/ を参照されたい）。

≪本郷サテライトの飲食利用中止について≫

● 2020 年秋、所有者である東京外国語大学（東京外語会にとって税負担加重のため母校に寄付した経緯）の施設企画課から東京外語会あてに通達があり、飲食にも利用の場合は当局より固定資産税の課税対象とみなされ税負担が増すため、同所での飲食は原則禁止となりました。

● 2001 年から 25 回にわたって開かれた本郷サテライトでのサロン仏友会は、懐かしい思い出として皆さまと共有したいと思います。

≪フランス語圏だより≫
ケベックの本気

ショーリ知加（1994/ 平 6）

私は大学卒業後、テレビ局で英語ニュース制作に携わり、その後マレーシアに移住し子育てのかたわらフリーで通訳翻訳の仕事をしていましたが、5 年前にカナダのケベック州モントリオールに来て学校に通い、現在は IT サポートの仕事をしています。

カナダの公用語は英語とフランス語ですが、フランス語圏はほぼケベック州のみで、他州は基本的には英語圏です。ケベックは国内で唯一、フランス語のみを公用語としている州でもあります。とは言え、モントリオールは完全なバイリンガル都市で、街で英語も普通に飛び交っています。お店に入った時に聞こえる挨拶は BonjourHi!　そしてお客さんが Bonjour で答えれば接客はフランス語で、Hi であれば英語で続きます。私も仕事ではユーザーが話す言葉によってフランス語か英語でサポートしていますが、話している間に言葉が切り替わることも多々あります。

ケベックのフランス語は、大学で習ったフランス語とは違った発音や表現が多く、最初は戸惑いました。「どういたしまして」が Bienvenue、「おはよう」が Bon matin、「スケジュール」が cédule など、英語の直訳が使われている表現もあったり、pas du tout の代わりに pantoute と言ったりと、いろいろ驚きながら大学以降すっかり錆びついていたフランス語の再学習をしています。

北米で唯一のフランス語圏であるケベックですが、ビジネス言語は歴史的に英語であったため、ケベック政府は 1977 年にフランス語憲章と呼ばれる法律を制定し、ケベック社会におけるフランス語の優位性を明言しました。

一般的に Loi 101 と呼ばれるこのフランス語憲章は、司法・行政などの公的部門や中規模以上の企業におけるフランス語の使用、移民の子供がフランス語で教育を受けること、など公共、経済、教育等ケベック社会の大部分でのフランス語の使用を義務付けています。私の勤務する会社も、社内に comité de francisation という委員会があり、業務がフランス語で行われているかを監督しています。

フランス語憲章はまた、消費者がフランス語でサービスを受ける権利も保証しており、OQLF（Office Québécois de la Langue Française）という役所が店舗などでフランス語で接客がされているかをチェックしています。実際、モントリオールで着物店を経営する私の知り合いは、フランス語ができる店員がいない、という「タレコミ」を OQLF にした人がいたそうで、立ち入り検査を受けて罰金を科せられました。

ケベック政府は非フランス語ネイティブの住民へのフランス語普及活動も積極的に行っており、多くのフランス語教室が無料どころか、生徒に補助金まで支給、という力の入れようです。

このように数々の政策によってフランス語保持・普及に努めているケベックですが、周りを英語圏に包囲されていることもあり、特にモントリオールでの英語の台頭、フランス語も英語も母国語としない移民の増加、若者のフランス語の質の低下、などフランス語は重大な脅威にさらされている、というのが政府の見解です。そこで更なるフランス語保守を目的として、今年の 5 月末にフランス語憲章の改正を含む Loi 96 が制定されました。

この新法では、業務におけるフランス語使用義務がより多くの企業に適用され、それを監督する OQLF の権限も拡大。また雇用の際にフランス語以外の言語能力を採用側が要求することができなくなります。ケベックの学生は、高校卒業後カレッジに進み、その後に大学となるのですが、新法では英語のカレッジの定員を制限し、さらに英語のカレッジに進んだ学生でも専攻の 3 科目はフランス語で履修する義務が生じます。

ケベックに来る移民に対しては、最初の 6 か月は役所などの公的サービスもフランス語以外の言語で受けることが可能ですが、6 か月以降はフランス語のみで提供。公的サービスに関しては、地元住民に対しても少数の例外を除いては一律フランス語のみ、となります。ただ、医療や司法などの分野は適用外、とありますがそれが実際どこまで認められるのか、各方面から懸念する声が出ています。

モントリオールは北米におけるゲーム開発の首都、と言われるほどゲーム産業が盛んなのですが、この新法が施行されるとゲーム業界に限らず、英語で業務を行うグローバル企業などもケベックから撤退または進出断念する恐れがあり、経済への影響を危惧する専門家も多くいます。

ケベックの言語環境の背景は実に複雑で興味深いです。フランス語を守る！というケベックの強い使命感は理解はできますし、実際モントリオールに住んでいて英語の台頭というのも実感しています。フランス語を守りつつ、それ以外の言語を排除することなく今の多言語環境を保持できれば、というのが一般的な理想なのでしょうが、そのバランス取りが困難なのだろう、と個人的には思っています。今後数年にわたり新法が施行される予定ですが、ケベック（特にモントリオール）の言語環境がどのように変わるのか、これからも注目していきたいです。

マカッサルの海辺から

伊藤　眞（1974/ 昭 49）

2022 年 8 月現在、私はインドネシアのマカッサルにいます。出発前、コロナが沈静化していないこの時期になぜ？と友人から訝しがられたのですが、もう 3 年近く現地訪問していないことにしびれを切らせ、こちらでコロナがやや下火になった今の時期を見計らって、日本を脱出しました。

私が文化人類学という学問に強い関心を抱くようになった理由の一つは、高校時代、出版されたばかりのレヴィ - ストロース (以下、L-S)『悲しき熱帯』の冒頭、「私は旅や探検家が嫌いだ。それなのに、いま私はこうして自分の探検旅行のことを語ろうとしている」という謎めいた一文に惹きつけられたことでした。私の入学当時の外語大では、「文化人類学」科目はまだ開講されていなかったのですが、構内にあるアジア・アフリカ言語文化研究所には多くの文化人類学者がおられました。後に指導教官をお願いした徳永康元先生（比較言語学）の紹介でちょくちょく AA 研にお邪魔したものです。一方、仏語の方は、あまり熱心な学生ではなかったのですが、篠田浩一郎先生の原書講読で『星の王子様』に続いて、L-S の『野生の思考』が教材として選ばれたときにはワクワクしたことを覚えています。

学部時代、人類学関連の本をいくら乱読しても物足りず、東京都立大大学院に進み社会人類学を専攻しました。その当時、L-S に魅了されて社会人類学を目指す院生が多くいました。また、フィールドワークを通じ、異郷の地に身を置くことで自分自身が変わりうる可能性を感じた院生もいました。おそらく、海外体験の長い外語の諸先輩の多くは、何を今更と思うかも知れませんが、未電化の村落に入り、現地のことばを習得し、住民の家族と長期間生活を共にするのは、駐在員暮らしとはだいぶおもむきが異なります。フィールドワークでは、できるだけ現地社会の内側に入り込み、そこから見えてくる社会関係のあり方、考え方を理解するというのが基本的な方法だからです。

大学院には修士博士課程合わせ、結局 8 年間も在籍しました。その間、国内では津軽や下北地方で民俗調査を進めましたが、初めて海外調査に出た時は、すでに 30 歳、かなり遅めの旅立ちでした。インドネシア語は日本である程度準備していたものの、調査地の村落では通常ブギス語が使われるので、教科書のないその言語の習得にも時間を要しました。調査地は、マカッサルから約 160 キロ離れたブギス人居住地域の村落と決め、そこが今日まで続く主なフィールドとなりました。

フィールドでは 1 年以上も生活するわけですから、月ごとにテーマを決めて調査を進めました。村役場にはまともな地図がありませんから歩測で地図を作り、戸別訪問で世帯票を作り、さらに親族関係の系図を作成する。そうした基礎的作業を進めながら、より具体的なトピックに絞って聞き取り調査も並行させます。長期調査で望ましいことは、現地の民俗社会におけるいわゆる「文化の論理」を知る手がかりになるような基本概念を自分でつかみ出すことです。これは、遠回りな方法ですから他の研究分野から理解されにくいのですが、社会を全体的に理解する方法として重要です。

私が最近関心を持っている「トランスジェンダー」というテーマも、フィールド経験から得たものです。ブギス人社会では、人間には 4 種類、すなわち、男性、男性的女性、女性的男性、女性があり、それら 4 つのカテゴリーは、はっきりと区別されず、グラデュエーションをなすと考えられています。なぜそうした考え方が成り立つかと言えば、ブギス社会では生物学的性よりも心の性のあり方を重視するからです。この考え方に従えば、私たちの社会で言ういわゆる「トランスジェンダー」は「男性的女性」と「女性的男性」に該当するのですが、注目すべきことは彼 / 彼女らは日陰の存在ではなく、一定の社会的役割を担っていることです。

ブギス人社会の性に対する考え方から見ると、生物学決定論による「性的二元論」に支配された私たちの社会は特異なものに見えてきます。ブギス社会の視点に立てば、日本はかなり奇妙な異文化なのです。対象としての異文化に関する知識の収集だけに留まらず、むしろ異文化を通して私たちの社会のあり方を内省させるような往還的視点が重要です。L-S『悲しき熱帯』冒頭の逆説めいた文章は、そうした視点の重要性を示唆していたのではないかと思います。

フィールド調査中の伊藤さん（左）

外国人教師がつづる外語大の思い出（No.2）
«Rencontres extraordinaires»

François Roussel

Mes années de « professeur invité » à la section française de Gaigodai, de 1998 à 2011, m'ont laissé le souvenir d'un grand bonheur professionnel, avec des collègues tous formidables, et surtout des étudiantes et étudiants extraordinaires. C'est d'elles et eux (par commodité j'écrirai « vous ») dont je voudrais parler ici.

Je me souviens d'abord de la rapidité stupéfiante de vos progrès en français. Débutants complets (en général) en première année, en deuxième année vous arriviez déjà à suivre un cours donné en français, et en 4e année certain-e-s réussissaient à vaincre le « boss ultime » : le Futsuken 1 kyû. Il est même arrivé que des étudiantes reviennent d'une année en France avec en poche le diplôme du bac !

Vous m'impressionniez aussi par votre motivation, votre volonté et votre courage. Une étudiante avait choisi à l'entrée à l'université une adresse courriel très explicite sur l'objectif qu'elle se fixait : « parler couramment le français » ! Un étudiant ne pouvait pas partir à l'étranger pour des raisons financières : il s'obligea donc à parler tous les jours avec les étudiants francophones en échange à Gaigodai. Il fit ainsi presque autant de progrès que s'il était parti ! Une autre étudiante, pour les mêmes raisons, passait 5 heures par jour dans les transports. Quelle émotion quand elle expliqua lors d'un exposé que, si elle ne déménageait pas plus près de l'université, c'était par amour pour sa ville natale !

Enfin j'ai aussi été frappé par votre curiosité immense et sincère, qui vous ouvrait la porte à des expériences uniques. Un étudiant, en voyage en France, sympathisa avec un Rom, qui l'invita gentiment à visiter son camp et sa caravane. Voilà qui n'est pas donné à tout le monde !

Je me souviens enfin avec nostalgie du « climax » des cours de conversation : l'examen de « sketchs » de fin de semestre. Devant tous les étudiants et les enseignants de 1e et 2e année réunis, les dialogues loufoques ou émouvants issus de votre imagination foisonnante provoquaient fous rires et applaudissements...

Pour diminuer le risque de « choc culturel », je tenais aussi beaucoup à enseigner les aspects socio-culturels du monde français et francophone. C'est pourquoi nous utilisions en classe les dialogues des « modules TUFS », que j'avais rédigés avec cette intention. Mais le summum « interculturel » était le cours de civilisation de 2e année (appelé 欧米第二地域基礎Ⅱ). J'essayais d'y casser les stéréotypes (comme : « le mariage se passe à l'église ») et de donner des informations utiles introuvables ailleurs (celles « qu'on ignore ignorer »). De tous les cours, c'était pour moi le plus important.

L'apprentissage interculturel se poursuivait aussi hors des cours, notamment avec le Lycée franco-japonais de Tokyo : journées d'immersion, animation d'un atelier de jeux en japonais… Votre participation était toujours enthousiaste !

J'ai toujours grand plaisir à recevoir des nouvelles ou à revoir d'ancien(ne)s étudiant(e)s. À ces occasions je suis heureux si je sens que mes cours ont pu aider certains à étudier, travailler, ou vivre en français. Beaucoup d'entre vous jouent aujourd'hui un rôle éminent d'interfaces entre le Japon et les pays francophones (dont la France) : dans des organismes publics, dans des entreprises classiques… ou même comme vigneronne !

Mais je voudrais aussi saluer celles et ceux qui ont fondé des familles mixtes avec un-e partenaire français-e ou francophone. N'est-ce pas la plus belle (et la plus difficile) réalisation interculturelle ?

L'une d'entre vous, mariée récemment avec un Français, ne m'en voudra probablement pas si je cite ici le message qu'elle m'a adressé : « *J'adore toujours la culture et la langue française et maintenant c'est une grande partie de moi-même. Tout ça a commencé à TUFS avec vous et je vous remercie de m'avoir donné plein d'occasions à Tokyo qui m'ont fait découvrir les charmes de cette culture.* »

Quel beau cadeau pour un vieux professeur !

◇◇◇